

E. Christopher Ellison, Robert M. Zollinger, Jr. (原著)
安達洋祐 (訳)

ゾリンジャー外科手術アトラス 第2版

森 正樹

九州大学大学院・消化器・総合外科

「真を写す」と書いて「写真」というが、こと手術書においては写真による手術書はむしろわかりにくいことが多い。一方イラストによる手術書は、余分な情報を削ぎ落とし本当に読者に伝えたいことが線画として表現され、実にわかりやすいが、過剰にデフォルメされたイラストでは正確性に欠ける。『ゾリンジャー外科手術アトラス』は、「右ページの美しく忠実な線画と左ページの詳しい解説」を特徴とする、まさに理想の手術書であり、世界中の外科医のバイブルともいえる書籍である。このたび、その原書第10版が安達洋祐氏の手により訳され、日本語版としてわれわれの手元に届くこととなった。

本書は前版の原書第9版（日本語版初版）からカラー化され、さらに今回の第10版（日本語版第2版）はコンピューター・グラフィックスによる高解像度カラーで描かれており、もはや芸術的作品ともいえる出来映えである。さらにこの日本語版の素晴らしいところは、日本の医学を知り尽くした安達氏により、日本の実情に合わせた「訳注」が300カ

所以上も追記されている点である。これはもはや訳書という範疇を超え、日本の外科医のために新たに書き下ろされた最新版と言っても過言ではない。

最近では腹腔鏡手術やロボット手術が日常診療として行われていることはご存じの通りである。本書は1937年の原書初版から改訂を重ね現在に至るが、今でも本書がバイブルとして読まれている理由の一つは、時代に合わせて腹腔鏡手術などのイラストや解説を改訂ごとに追加していることであろう。しかし本書に対して私がもっと強く感銘を受けたことは、新しい術式のみならず、かつては日常的に行われていた歴史的な手術をも本書が重要視している点である。本書の序には「日常診療の性質上、教科書に掲載されていないような状況に一般外科医が遭遇することはまれではなく、（中略）そのようなときには（中略）『古い手術』に助けられることになるでしょう」と書かれている。つまり外科手術の本質を知っておくこと、もっと簡単にいえば昔の外科医はどのようにやっていたかを知っておくことは、

手術中に危機的状況に陥った時の解決策を知っておくことを意味し、そのためにも本書はまさにバイブルといえるであろう。

また安達氏が訳者の序にも書かれている通り、本書の根底に流れるもう一つの重要な考え方として、安全性を最優先した丁寧な手術をめざしている点も記しておきたい。「丁寧に/やさしく」という言葉は原書の114カ所に、「注意して」は374カ所に使われているそうである。そのように考えれば、本書は若き外科医にとっては手術手技を学ぶのみならず、手術に対する姿勢をも学ぶことができる必携の手引き書であり、また中堅以上の外科医にとっても外科医としての幅を広げる知識の泉として、ぜひ一読いただきたい名書といえる。このような手術書をわれわれの手元に届けてくれた安達氏に心から敬意を表したい。

●A4/頁 576/2018年

定価：本体 15,000 円＋税

[ISBN978-4-260-03228-5]

医学書院 刊